

令和3年度 自 己 評 価 表

鳥取県立青谷高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	人づくり (キャリア教育の推進) － 自己肯定感を育み、社会で信頼され、社会に貢献する人材の育成 －	今年度の 重点目標	①学力の向上：学びへの意欲向上、基礎学力の充実 ②進路の実現：進路意識の向上、進路指導の充実 ③社会人基礎力の育成：生活習慣の確立、マナー・作法の向上、自己肯定感の育成 ④地域連携の推進：「青谷学」と「課題探究」の充実、地域の行事への参画・参加、保育園・小学校・中学校等との連携、広報活動の推進 ⑤業務改善の推進：時間外業務時間の縮減、学校行事等の見直し、部活動の計画的実施
-------------------	---	--------------	---

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）

年 度 当 初					評 価 結 果 (9) 月																	
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策															
①学力の向上	○学びへの意欲向上 ・授業改革（タブレット端末等ICTを活用した授業実践）の推進	・総合学科の特性を活かした多様な選択科目、少人数制及びティーム・ティーチング等により、わかりやすく、魅力のある授業実践に取り組んでいる。 ・多くの教員がICT等を活用し、昨年度の公開授業では、各教科少なくとも1名がICTを活用した授業を行った。iPad等の活用により、学習意欲が向上した生徒は約97%と肯定的意見が多い。	・各教科が特性を活かし、わかりやすく、魅力のある授業実践に取り組んでいる。さらに、GIGAスクール構想を見据えて、多くの教員がICT等を効果的に活用している。 【指標①】 ICT等を活用して授業を行う教員が90%以上 【指標②】 ICT等を活用した授業の実施によって学習意欲が向上する生徒が80%以上 ・GIGAスクール構想に向け、教科指導におけるICT活用において、「とっとりICT活用ハンドブック」に記載のレベル2に達している。	・GIGAスクール構想に備え、ICT等を活用した効果的な授業を行うための職員研修を実施する。 ・ICT等を活用した公開授業を各教科で実施し、教科を問わず積極的に参観し合い、研修を深める。 ・授業改革の研修や公開授業に進んで参加しやすい環境を整える。	・「GIGAスクール導入に向けた青高プラン」を策定し、（1）施設・設備の整備、（2）GIGAスクールに向けた体制整備、の両面から組織的に準備を進めている。 ・毎月の定例職員会議後に全職員対象に「GIGAスクール研修」を開催し、その結果、日常的に授業やHR等でのICTの活用が進んでいる。 ・全ての教科でICTを活用した公開授業を実施することとしており、9月末段階で1名が実施している。 ・生徒全員がgoogle classroomに登録し、適宜課題や反転授業などに活用されている。	C	・ICT等活用のための職員研修やICTを活用した公開授業を継続し、さらにわかりやすく魅力のある授業作りを図る。															
	・授業規律の向上	・授業規律は概ね良いが、授業に対する意欲が不足している生徒がいる。 ・昨年度、授業に遅刻し、入室許可書の累積枚数が6枚以上の生徒は4人であった。	・生徒が授業に意欲的に取り組んでいる。 【指標③】 学校評価アンケート問2で「思う」とする割合が5%増加 【指標④】 入室許可書の累計枚数6枚以上の生徒はいない	・授業開始時に「本時の目標」を明示することで、生徒が授業の見通しを持ち、授業終了時には、その達成度を実感できるようにする。 ・入室許可書の厳格な運用と細やかな指導を徹底する。 ・全ての生徒対象に生徒面談を定期的に実施するとともに、授業規律が遵守されるように、教科・担任・年次・分掌が連携して、早い段階から指導を継続する。	・授業開始時に「本時の目標」や授業の流れなどの明示をさらに徹底する必要がある。 ・授業の規律を守り、意欲的に学習する生徒が多いが、一部改善の余地がある。年次や教科等で情報交換を密にし、連携して改善に取り組んでいる。 ・9月末現在、入室許可書の累計枚数が6枚以上の生徒は1名である。本年度は、各定期考査後の年次会で入室許可書の状況を確認し、情報共有を図っている。		・入室許可書の枚数が少ない段階から、早めの指導を継続する。															
		○基礎学力の充実 ・学び直しの実施	・国語、数学及び英語が計画的かつ丁寧に学び直しに取り組んでいる。昨年度末には、さらに効果的な方策や教材の検討を行い、速やかに対応を図っている。 ・基礎力診断テストのDゾーンの生徒の割合は各教科とも減少し、学び直しの効果が出ている。	・基礎学力の定着が見られる。 【指標⑤】 基礎力診断テストの各教科のDゾーンの生徒の割合が年度当初より5%減少	・引き続き、国語での学び直し教材や学校設定科目（基礎数学・基礎英語）を有効的に活用して、学び直しに取り組む。	・国語、数学及び英語を中心に計画的かつ体系的に学び直しに取り組んでいる。各教科で計画的に学び直し教材等を活用して課題等を課し、こまめな提出・点検を行い、生徒の学習習慣と学力の定着をサポートしている。 ・国語科では、本年度より1年次生全員が漢字検定を受検し、目標をもって学習に取り組むよう指導を継続している。 ・9月実施の第2回基礎力診断テストでは、1年次、2年次ともにDゾーンの生徒の割合が、4月実施の第1回基礎力診断テストと比較して全体的に減少し、学び直しの効果が徐々に現れている。 <table border="1"><tr><td></td><td>国語</td><td>数学</td><td>英語</td><td>3科</td></tr><tr><td>1年次</td><td>△0.7p</td><td>△15.1p</td><td>△9.9p</td><td>△16.9p</td></tr><tr><td>2年次</td><td>4.9p</td><td>△3.8p</td><td>△15.4p</td><td>△12.1p</td></tr></table>		国語	数学	英語	3科	1年次	△0.7p	△15.1p	△9.9p	△16.9p	2年次	4.9p	△3.8p	△15.4p	△12.1p	C
	国語	数学	英語	3科																		
1年次	△0.7p	△15.1p	△9.9p	△16.9p																		
2年次	4.9p	△3.8p	△15.4p	△12.1p																		
	・自宅学習の定着	・定期考査時の自宅学習時間調査では好結果を出したが、日頃の自宅学習習慣が定着している生徒は少ない。	・自学学習時間が増え、授業の予習、復習をする習慣が定着している。 【指標⑥】 学校評価アンケート問12で「思う」とする割合が昨年度より5%増加	・日頃から各教科で授業の予習と復習に取り組めるような課題を工夫し、こまめな提出及び点検を継続する。 ・担任又は教科担任の立場で生徒に学習の必要性を説き、モチベーションを高めるような働きかけを継続する。	・自宅学習時間調査を、1学期中間考査（5月）・期末考査（6月）に実施した。昨年度同期と比較し2年次は増加傾向、3年次は顕著に増加している。一方、1年次にはさらなる伸びが期待される。学校全体としては、ここ3年間で約76分、104分、118分と自宅学習時間は増加している。	・定期考査期間ではない、平常時の家庭学習も重要であるので、新たに、平常時の自宅学習時間調査を1月に導入する。																

令和3年度 自 己 評 価 表

鳥取県立青谷高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	人づくり (キャリア教育の推進) ー 自己肯定感を育み、社会で信頼され、社会に貢献する人材の育成 ー	今年度の 重点目標	①学力の向上：学びへの意欲向上、基礎学力の充実 ②進路の実現：進路意識の向上、進路指導の充実 ③社会人基礎力の育成：生活習慣の確立、マナー・作法の向上、自己肯定感の育成 ④地域連携の推進：「青谷学」と「課題探究」の充実、地域の行事への参画・参加、保育園・小学校・中学校等との連携、広報活動の推進 ⑤業務改善の推進：時間外業務時間の縮減、学校行事等の見直し、部活動の計画的実施
-------------------	---	--------------	---

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）

年 度 当 初					評 価 結 果 (9) 月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
②進路の実現	○進路意識の向上 ・進路に関する取組の充実	・進路に関する講演等に対する生徒の評価がまだ低い。	・進路に関する行事や講演をとおして、生徒の進路意識が向上している。 【指標⑦】 学校評価アンケート問17で「思う」とする割合が昨年度より5ポイント向上	・面談を中心にそれぞれの年次で実施される行事のつながりや意味を明確にして、事前準備を行う。 ・「産業社会と人間」の内容を充実させるとともに、「総合的な探究の時間」の内容と体系的・系統的になるよう工夫する。	・担当者による事前打ち合わせについては、念入りにできている。 ・事後指導についても、振り返りを含めてしっかりとできている。 ・進路だよりは1号に留まっている。 ・ふるさとキャリアパスポートの活用が不十分である。	B	・引き続き、日々の指導を継続する。 ・「産業社会と人間」と「総合的な探究の時間」の内容を再検討し、より体系的・系統的になるよう工夫する。（ふるさとキャリア教育全体計画） ・ふるさとキャリアパスポートを計画的に活用する。
	・進路体験（オープンキャンパス・インターンシップ）の充実	・生徒の希望によりインターンシップ先を選定している。 ・オープンキャンパスは生徒主体により実施している。	・2年次3学期には志望が明確になっている。	・事前はもちろん事後指導を綿密に計画する。（総合的な探究の時間、LHR） ・進路だよりを活用する。			
	・面談、事前事後指導の充実	・年次、進路と連携して継続的に面談を実施している。	・大人を信頼して話ができるようになる。	・情報交換を密にして、寄り添う面談を行う。また、すべての生徒に対して極め細やかな実施となるよう留意する。			
	○進路指導の充実 ・早期の進路目標の明確化	・令和3年1月進路希望調査における進路未決定者の割合 1年次：8名14.0% 2年次：3名 3.8% ・進路志望が年次進行とともに大きく変化する。 1年次：7割が進学希望（うち8割が専門学校） 2年次：6割が進学希望（うち4割が専門学校） 3年次：5割が進学希望（うち5割が専門学校） ・1年次の系列選択及び科目選択が教務部と年次主体で、進路指導部や教科の関わりがやや弱い。	・各年次とも進路未定の生徒の割合を5%以下にする。（【指標⑧】） ・4年制大学を目指す生徒が増えている。 ・将来を見据えた科目選択になっている。	・進路だよりを活用して地元企業や学校の特色などを今以上に周知する。 ・安易な系列選択にならないよう進路指導部も積極的に関わり、すべての生徒に対して極め細やかな指導を行う。	・進路だよりは1号に留まっている。 ・9月の進路希望調査の結果、1年次の進路未決定率が高い。 【進路未決定生徒】 2年次 0% 0人／55人 1年次 25% 15人／56人 【4年制大学希望者】 2年次 5.3% 3人／55人 1年次 5.1% 3人／56人 ・進路指導部として系列選択への関わりが薄かった。	D	・引き続き、年次と進路指導部との連携を更に密にする。
	・進路実現に必要な学力の育成	・4年制大学進学プロジェクトによる横断的な生徒把握計画開始。（令和2年度より） ・基礎力診断テストの事前事後指導がやや弱い。 ・第3回基礎力診断テスト（令和3年1月実施）の状況 1年次：Bゾーン7.0%（前年度比約3.0ポイント減） 2年次：Bゾーン2.5%（前年度比約5.5ポイント減）	・基礎力診断テスト Bゾーン以上 1割以上（【指標⑨】）	・4年制大学進学プロジェクトを中心に基礎力診断テストの事前、事後の指導計画を立てる。	・4年制大学進学プロジェクトについては、未実施であるが、年次と教科（国語・数学・英語）が連携して平常補習や夏季補習を実施している。 ・9月の基礎力診断テストにおけるBゾーン以上についてはほぼ目標を達成できているが、底上げは必要である。 Bゾーン以上（国・数・英 3科） 2年次 12.7% 7人／55人 1年次 8.9% 5人／56人 ・事前・事後指導を年次と教科と連携を図って行った。		

令和3年度 自 己 評 価 表

鳥取県立青谷高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	人づくり（キャリア教育の推進） － 自己肯定感を育み、社会で信頼され、社会に貢献する人材の育成 －	今年度の 重点目標	①学力の向上：学びへの意欲向上、基礎学力の充実 ②進路の実現：進路意識の向上、進路指導の充実 ③社会人基礎力の育成：生活習慣の確立、マナー・作法の向上、自己肯定感の育成 ④地域連携の推進：「青谷学」と「課題探究」の充実、地域の行事への参画・参加、保育園・小学校・中学校等との連携、広報活動の推進 ⑤業務改善の推進：時間外業務時間の縮減、学校行事等の見直し、部活動の計画的実施
-------------------	--	--------------	---

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）					評 価 結 果（9）月		
年 度 当 初							
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
③社会人基礎力の育成	○生活習慣の確立 ・学校の日課表に沿った規則正しい生活の実現	・遅刻者数は減少しているが、欠席者数が増加している。	・学校を中心に据えた行動意識が醸成され、学校生活のルールに基づいた生活習慣が定着している。 【指標⑩】 欠席率・遅刻率が共に2.00%未満	・生徒への指導は時間をおかずに適宜行う。 ・保護者への連絡を密にする。（必要に応じて家庭訪問等も行う。）	・保護者から連絡のない遅刻、欠席の際、本人への速やかな指導、保護者への速やかな連絡は概ねできている。 ・9月末時点の欠席率・遅刻率 欠席率 1年次2.01 2年次2.48 3年次0.82 遅刻率 1年次0.84 2年次0.82 3年次0.53	C	・継続して本人、保護者への連絡を速やかに行っていく。
	・整理・整頓・清掃（3S）の励行	・教室内での自身の荷物の整理が十分でない生徒もいる。（机上や床） ・ごみの排出量が多く、分別もまだ不十分である。	・身の周りの整理・整頓ができ、学習環境を整える習慣が定着している。 【指標⑪】 学校評価アンケート問4で「思う」とする割合が昨年度より3ポイント向上 ・ごみ排出量の削減。	・正副担任が、SHRで荷物の整理を促し指導する。 ・ごみの分別や持ち帰り、古紙処理等について徹底する。	・整理、整頓への声掛けをこまめに行っており、個人部分では整理できつつあるが、共有部分の3S（整理、整頓、清掃）についてはまだ不十分である。		・SHR時は勿論、各授業の開始の際にも指導を徹底していく。（朝清掃の徹底も含む）
	○マナー・作法の向上 ・身だしなみ・あいさつ・言葉遣いの向上	・制服の着こなしが大きく崩れた生徒はほとんどいない。 ・朝から元気よく挨拶できる生徒はまだ少ない。 ・TPOに合わせた言葉遣いができない生徒が若干いる。	・他者を意識し、身だしなみや行動を整えることができる。 【指標⑫】 学校評価アンケート問7で「思う」とする割合が昨年度より5ポイント向上 ・相手のことを思い、自発的に挨拶ができるようになる。 【指標⑬】 学校評価アンケート問5で「思う」とする割合が昨年度より5ポイント向上 ・TPOに応じた正しい言葉遣いができている。 【指標⑭】 学校評価アンケート問6で「思う」とする割合が昨年度より5ポイント向上	・年度当初に制服着こなしセミナーを各年次で実施する。 ・時を逃さず、タイムリーな指導を心がける。 ・教職員の方からも元気よく挨拶をしていく。 ・生徒会執行部による定期的な挨拶運動を継続して行なう。 ・出来ていない生徒に対しては、その場で理解できるように教職員が協力して指導する。	・担当年次を超えて、生徒への声掛けや指導を行う教職員が増えている。 ・後期生徒会執行部員による挨拶運動を計画中である。	C	・継続して、タイムリーな指導を担当年次を超えて全教職員で行っていく。 ・教職員の方から挨拶、一言声掛けをしていく。 ・生徒会執行部の挨拶運動について、継続できる方法を具体的に検討する。
	○自己肯定感の育成 ・人権教育・特別支援教育・性教育・食育などの取組の充実	・外部人材も活用し、生き方あり方に関する多くの講演会やLHR等を実施している。 ・特別支援教育等の職員研修を実施している。	・そのままの自分を認め、自分を尊重し、自己価値を感じて自らを肯定するとともに、他者の存在価値を認め、自他共に尊重し合える力が身についている。	・生き方あり方に関する講演会等を精選し、より効果的なものにする。 ・外部人材を活用した講演会やLHRを充実させる。 ・職員研修等を充実させ、生徒の指導に生かす。 ・人権教育LHRの事後指導を充実させ、議事録を残すなどして次回のLHRにつなげていけるように取り組む。	・人権教育講演会といのちの講演会を兼ねて、性の多様性についての講演会を企画している。 ・特別支援教育に関する職員研修では、具体的な事例について学び、生徒への接し方や学校生活での対応についての方策を検討することができた。 ・人権教育LHRでは、事後指導を充実させるため議事録をとり、次回の指導につなげるようにしている。	C	・過去の方法に拘らず、生徒に有効な手段をその都度検討して、実施していくようにする。 ・様々な情報の共有を行うことで、継続した幅広い指導へと繋げていく。
	・褒める活動の実践	・褒める実践が不十分である。	・教職員の褒める実践力が向上している。	・アンテナを高くして情報収集に努めたり、hyper-Q活用研修を活かした指導を心掛けたりする。	・hyper-Q活用研修会を実施した。		
	・部活動の活性化	・部活動加入率が低く、部員数不足の部もあり、部活動の活性化に課題がある。	・部活動加入生徒の満足度が高まる。 【指標⑮】 学校評価アンケート問20で「思う」とする割合が昨年度より3ポイント向上	・生徒のみの活動とならないように顧問が協力して活動を支える。 ・各部で目標を設定する。	・部活動については、新型コロナウイルスのため様々な制限があり、積極的な活動とはなっていない。		・部活動やボランティア活動等においては、新しい生活様式にあった活動を実施していく。
	・ボランティア活動の活性化	・多くの生徒がボランティアに参加したが、生徒の主体的活動の広がり是不十分である。	・全校生徒の5割以上がボランティアに参加している。 （【指標⑯】）	・ボランティア情報の広報・掲示方法等を工夫する。 ・ボランティア参加状況を、年次や分掌とも協力して幅広く集約する。	・ボランティアについても、新型コロナウイルスのため制限があり、幅広く参加することができなかった。		

令和3年度 自 己 評 価 表

鳥取県立青谷高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	人づくり（キャリア教育の推進） － 自己肯定感を育み、社会で信頼され、社会に貢献する人材の育成 －	今年度の 重点目標	①学力の向上：学びへの意欲向上、基礎学力の充実 ②進路の実現：進路意識の向上、進路指導の充実 ③社会人基礎力の育成：生活習慣の確立、マナー・作法の向上、自己肯定感の育成 ④地域連携の推進：「青谷学」と「課題探究」の充実、地域の行事への参画・参加、保育園・小学校・中学校等との連携、広報活動の推進 ⑤業務改善の推進：時間外業務時間の縮減、学校行事等の見直し、部活動の計画的実施
-------------------	--	--------------	---

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）

年 度 当 初				評 価 結 果 (9) 月				
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	
④地域連携の推進	○「青谷学」と「課題探究」の充実 ・地域への関心の高まり	・「青谷学」と「課題探究」の学習活動をととして、生徒の地域への興味関心が高まっている。	・生徒の地域への関心が高まり、主体的に地域に参画・貢献する姿勢・態度が養われている。	・地域の資源の活用方法や地域の課題解決法を考案し、地域に提案する。	・「課題探究」において、地域資源の活用方法や地域課題の解決方法を考案、提案し、地域から協力を得ている。	C	・課題探究は12月に成果発表を実施、青谷学は2月にポスターセッションを実施する。	
	・成果の発表	・「課題探究」において「あおこうまるしえ」を道の駅西いなば気楽里で地域の方を招いて実施した。	・「青谷学」と「課題探究」の取組をととして、コミュニケーション力やプレゼンテーション力が生徒の6割で向上している。	・「あおこうまるしえ」を校外において地域の方と共に実施し、県内外の多くの方に来場していただく。	・「あおこうまるしえ」は新型コロナウイルス感染防止のため中止にした。			
	○地域の行事への参画・参加 ・生徒の地域行事への参加数増大	・地域の行事が1回開催され、ボランティアとして参加した生徒がいる。	・地域活動に5割以上の生徒が参画・参加している。（【指標⑰】）	・「青谷学」で町づくり体験としてあおいち等の地域行事に参加する。	・新型コロナウイルス感染防止のため地域行事がすべて中止となり、参加できていないので【指標⑰】【指標⑱】【指標⑲】の評価はできない。	—	・開催可能となったボランティアを生徒に周知するとともに、引き続きボランティア参加の意義等について指導する。	
	・生徒の充実感・有用感の高まり	・地域行事に参加した多くの生徒が充実感・有用感を感じている。	・地域活動に参加した生徒の8割以上が有用感と自己肯定感を高めている。（【指標⑱】）	・「課題探究」の実践活動をととして、地域活動への参加意識を高める。				
	・地域からの生徒・学校への信頼・期待の高まり	・生徒が地域行事等に参加することについて、地域の方から肯定的な評価をいただいている。	・地域活動で関わった地域の方の8割以上から肯定的に評価されている。（【指標⑲】）	・地域活動参加時の心得として、社会人として身につけておくべきルール・マナーについて事前指導をする。				
	○保育園・小学校・中学校等との連携 ・地域のすくすく保育園、青谷小学校、青谷中学校、TOD※との連携 ※鳥取の暮らしが幸福に満ちあふれるように大学生ができることをすることを目的とし、薄れていくつながりや耕作放棄地の増加を食い止めるといった多種多様な地域課題に取り組んでいる鳥取大学の学生を中心とする団体。	・すくすく保育園と青谷小学校との連携は進んでいるが、青谷中学校との連携が進んでいない。	・すくすく保育園、青谷小学校、青谷中学校との連携が充実している。	・教科、進路指導部、年次等と連携して、保育士や幼稚園教諭を目指す生徒への参加を呼びかける。	・すくすく保育園で保育実習を行っている。	B	・保育園、小学校、中学校との連携が継続するよう検討する。	
	・青谷小学校、青谷中学校、TOD※との連携	・大学生の任意団体TODとの交流を始めている。	・TODとの交流を開始し、その活動が軌道に乗るような実践が継続できている。	・保育士や幼稚園教諭を目指す生徒への参加を呼びかける。	・青谷中学校との連携のあり方を検討する。			・青谷中学校との連携を行っている。
	・「青谷高校活性化を支援する会」、青谷町総合支所との連携	・青谷町総合支所を中核とした、「青谷高校活性化を支援する会」等の地域の諸組織との連携がとれ、本校に対してさまざまな支援をいただいている。	・「青谷高校活性化を支援する会」等で定期的な意見交換が行われ、地域の協力が得られている。	・「青谷高校活性化を支援する会」及び「青谷地域にぎわい創出実行委員会」の会合等で本校の取組を報告し、協力を得る。	・「青谷高校活性化を支援する会」及び「青谷地域にぎわい創出実行委員会」に参加し、協力を得ている。			・「青谷上寺地遺跡利活用推進事業部会」に参加し、遺跡の利活用等を検討している。
	○広報活動の推進 ・ホームページの充実と更新	・ホームページの迅速な更新を行っている。	・諸行事に限らず、各教科においても授業の様子を年1回は掲載する。	・各教科、各年次、各分掌でホームページを更新する。	・SNSのInstagramを開設した。	C	・継続的にホームページの更新、Instagramの投稿を行う。	
	・地域や中学生などへの情報発信	・学校のポスターを作成し、市内各所に掲示していただいた。	・あらゆる情報発信により、中学生や保護者、地域の方の本校への関心が高まっている。	・「学校案内」を更に見やすく作成し、配布する。	・SNS等にも掲載する。			・各分掌等は毎日のように更新しており、Instagramは1件の投稿につき、300件前後の閲覧がある。
	・地域や中学生などへの情報発信	・学校のポスターを作成し、市内各所に掲示していただいた。	・あらゆる情報発信により、中学生や保護者、地域の方の本校への関心が高まっている。	・「学校案内」を更に見やすく作成し、配布する。	・学校のポスターを新しく作成し、配布した。		・引き続き新しい取組み等を地域に発信する。	

令和3年度 自 己 評 価 表

鳥取県立青谷高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	人づくり (キャリア教育の推進) ー 自己肯定感を育み、社会で信頼され、社会に貢献する人材の育成 ー	今年度の 重点目標	①学力の向上：学びへの意欲向上、基礎学力の充実 ②進路の実現：進路意識の向上、進路指導の充実 ③社会人基礎力の育成：生活習慣の確立、マナー・作法の向上、自己肯定感の育成 ④地域連携の推進：「青谷学」と「課題探究」の充実、地域の行事への参画・参加、保育園・小学校・中学校等との連携、広報活動の推進 ⑤業務改善の推進：時間外業務時間の縮減、学校行事等の見直し、部活動の計画的実施
-------------------	---	--------------	---

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）

年 度 当 初					評 価 結 果 (9) 月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
⑤業務改善の推進	○時間外業務時間の縮減 ・時間外業務時間縮減の推進	・時間外業務時間の全体平均は少ない。 ・月45時間以上の延べ人数は0人である。	・時間外業務時間縮減によって教職員が健康で、教育活動が充実している。 【指標⑳】 月80時間以上の者0人 【指標㉑】 教職員の年休取得が平均年15日（令和2年：12.66日）	・管理職は、勤務状況を把握し、日常的に声掛けを実施する。	・毎月開催している衛生委員会の結果を校内掲示板上に掲載し、時間外業務の状況等について報告している。 ・給与勤怠管理システムによって時間外業務の状況を把握し、日常的に声をかけている。 ・月80時間以上の者は0人である。 ・長期休業期間や定期考査期間等に年休取得を奨励している。 ・年休の取得状況は平均9.40日である。（同時期 R2：8.55日 R1：8.96日）	B	・継続して取り組む。
	○学校行事等の見直し ・学校行事等の精選	・行事や講演等が多く行われ、生徒・教職員に負担感もある。	・行事の見直しが実施され、生徒・教職員の負担感が軽減されている。	・諸行事等の優先順位をつけたり、重複する内容の行事等を見直したりする。	・「人権教育講演会」と「いのちの講演会」を兼ねている。	C	・継続して取り組む。
	○部活動の計画的実施 ・部活休養日の適正な実施 ・顧問間の部活業務分担	・多くの部が週一日休養日を設けている。 ・部顧問による部活業務の分担を推進しているが、まだ改善の余地はある。	・年間計画・月間計画に基づいて、適正に部活動の運営が行われている。	・管理職は、各部の活動状況を把握し指導する。	・各部活動は、毎月の活動計画及び実績報告をするとともに、「部活動に係る方針」の規定を遵守しながら活動している。	B	・継続して取り組む。